



豊田市美術館
オンライン
鑑賞ガイド



Toyota
Municipal
Museum
of Art

豊田市美術館

作品ガイドボランティアによる

コレクション展「電気の時代」紙上トーク

岸田劉生とグスタフ・クリムト

外光がわずかに届く展示室、私たちを「電気の時代」に迎え入れてくれたのは、劉生の《代々木付近》(1915)。そして隣には、クリムトの《オイゲニア・プリマフェージュの肖像》(1913/14)が、穏やかな表情を浮かべています。

Q 劉生とクリムトの作品の共通点と違いを探してみましよう。

岸田劉生は1891年に生まれ、1929年に38歳で亡くなっています。いっぽう、クリムトはもう少し長生きしていて、1862年に生まれ1918年に亡くなっています。ふたりの作品はそれぞれ東京とウィーンと、遠く離れた場所で、ほぼ同時期に制作されたものです。劉生の《代々木付近》は労働者を含む風景画が描かれていますが、クリムトが描いているのは上流階級のパトロンの肖像画。ですが、劉生の風景画をよく見てみれば、通行人の服装は帽子にマントでどこかおしゃれな感じですが、いっぽうクリムトの描く婦人の服や背景の様子は花畑のようなイメージがありますね。風景画と肖像画といった違いはありますが、お互いに比較してみるとさまざまな共通点が見つけれそうです。

column

スペイン風邪

コラム

現在、私たちはウィルス感染症の不安と緊張の日々を過ごしています。約100年前には、「スペイン風邪」と呼ばれるインフルエンザの一種が世界各地で爆発的に発症し、3000万人以上が亡くなったと言われています。グスタフ・クリムトやエゴン・シーレも、1918年スペイン風邪で亡くなっています。クリムト56歳、シーレ28歳でした。日本でも多くの方が亡くなりました。岡崎市出身の画家、村山槐多も22歳で犠牲になっています。

スペイン風邪ではありませんが、ウィーン分離派の創立に加わり、ウィーン工房を設立するコロマン・モーザー。そして、ガラス、アルミニウムなど新しい素材で建築、椅子や電灯も設計したオットー・ヴァーグナー。彼らもクリムトと同じ年に亡くなっています。



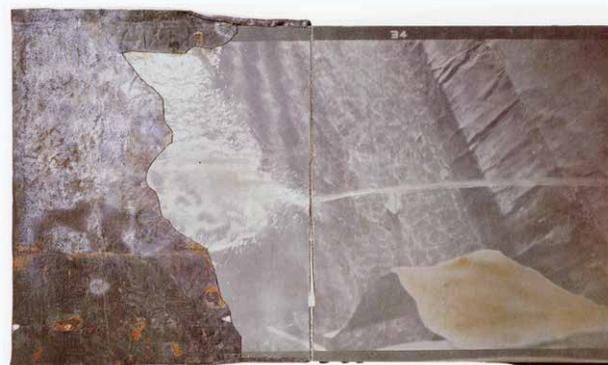
牧野義雄とアンゼルス・キーファー

Q 《チェルシーの発電所》(1951-54) と《重い水》(1987) を比べてみましょう。

ロンドンで「霧の画家」と呼ばれた牧野義雄の《チェルシーの発電所》をよく見てみると、発電所の煙突の向こうに、重なるように太陽が描かれています。4本の煙突を持った煉瓦造りの建物は、テムズ川沿いにそびえ立つ電力の源であると同時に、ロンドンのランドマークのひとつでもありました。その姿は、イギリスのロックバンド、ピンク・フロイドのアルバムジャケットや、ビートルズの映画にも登場していることから、ロンドンの特徴的な風景として知られていたことがうかがえます。

次に、アンゼルス・キーファーの作品をみましょう。同じような煙突のかたちが見えます。じつはこれはキーファーが自分のスタジオに原子力発電所を模してつくった構造で撮影された写真です。タイトルは「重い水」。ほかのページには↓のような写真がならんでいます。「地上の太陽」とも呼ばれる原子力発電をキーファーはまずは一人でやり直そうとしています。

1950年代の日本人がロンドンで描いた発電所、1980年代にドイツ人の作家がスタジオでつくった原子力発電のようなもの、それぞれなにを伝えようとしているのでしょうか。



アンゼルス・キーファー《重い水》 左:2-3ページ 右:18-19ページ



ペーター・ベーレンス と ヤノベケンジ

Q ガラスの向こうの作品はどうみえますか？

作品の置かれている場所で作品から受ける印象が変わることがあります。

ガラス越しに隔てられた作品たちをあなたはどのように見るのでしょうか？

少し考えてみましょう。

ショーウィンドウにならんだ商品のよう？

過ぎ去った時間を振り返り、珍しい収集品を見る気分？

デザインと美術と分けて扱われることも多いですが、その違いはどこにあるのでしょうか？

ベーレンスは19世紀末から20世紀の前半にかけて活躍したドイツ人のデザイナーです。彼が活動したのは、ちょうど電気が普及する時代。大規模な工場から身近なプロダクトデザインまでを新しくデザインしなおす時期でした。そこでは製造に

あたったの合理性と使いやすさ、そして商品として販売するためのラインナップなど、今日のプロダクトデザインに通ずるいくつかの重要な視点が既に生まれています。

いっぽう、展示ケースの奥に佇んでいるのは、ヤノベケンジという日本の現代美術家が20世紀末に制作した「スーツ」です。胸にはガイガーカウンターという機械が放射線を検知するたびにカウントし、発光しています。1970年の大阪万博の撤去後の「未来の廃墟」を子ども時代に遊び場に、大人になってチェルノブイリの廃墟を訪れたヤノベはこのスーツを「生き延びるため」に制作しました。

かたや電気の時代の黎明に生み出されプロダクトデザイン、かたやその時代のさまざまな事故を経た後に生み出された美術作品。いわゆるジャンルは違いますが、それらは共通してそれぞれの時代の営みの証言なのです。

コレクション展「電気の時代」いかがでしたでしょうか？

展示の流れを心に留め2つの作品を見比べてみると、普段とは違った鑑賞ができたのではないのでしょうか。

いまを生きる私たち、これからも電気の時代は続いていきます。

美術作品はひとつのつながりだけでなく、いろいろに読み解く可能性に満ちています。ぜひ皆さんも独自のつながりを探してみてください。